

チューバ

【英：tuba / 独：Tuba / 伊：tuba / 仏：tuba】

.....**楽器データ**.....

サイズ：高さ約 90～95cm ※ 楽器によってかなり違う

チューバの(有)名曲：ポーン=ウィリアムス「チューバ協奏曲」、《ニルンベルグのマイスタージンガー》前奏曲、《幻想交響曲》、《春の祭典》、「スターウォーズ」ジャバ・ザ・ハットのテーマ、「未知との遭遇」(宇宙人の声)

チューバを愛した作曲家：マーラー、ワーグナー、R. シュトラウス、チャイコフスキー、ブルックナーなど

チューバ吹き有名人：ジョン・フレッチャー、アーノルド・ジェイコブス

.....

オーケストラの管楽器のなかで、おそらく一番重たくて長〜い管を持っている楽器……といえはチューバでしょう。コントラバスなどとともにおうけストラの響きを低音で支える重要な存在です。今回はこのチューバを紹介しましょう。

管楽器のなかで最も低い音を出すチューバ。もちろん管も太く長く、全部の管を合わせると、長いものでは9メートル以上もあるそうです。その長い管で、一人でオーケストラ全体を相手にできるほどの豊かな音を出すことができます。

チューバの歴史は比較的新しいものです。チューバが発明される以前は、セルパンという巨大なへびのようにS字にくねった楽器が使われていました。これは唇をプルプル震わせて音を出す金管楽器の形式ですが、木製で笛のように穴を指でふさぐ楽器でした。セルパンはやがて、オフィクレイドというサクソとファゴットの合の子のような金属製の楽器に取って代わられます。しかしこれらの楽器は、音程が悪かったり、トランペットやホルンに対抗するような響きや音量が出せなかったのでしょう。1835年にチューバが発明されました。他の金管楽器に比べたらかなり遅いことです。ベートーヴェンの「第九」の初演が1824

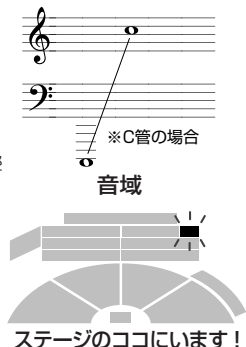


左がF管、右がC管のチューバ

年、亡くなったのが1827年です。次の演奏会で取り上げるベルリオズの《幻想交響曲》の初演は1830年。この曲は現在はチューバ奏者2名で演奏す

ることで知られますが、本来はオフィクレイドの楽譜でした。オーケストラで最初にチューバを使ったのはワーグナーとされますが、ベルリオズも初期のころにチューバの価値に気づいた作曲家の一人で、自らのオフィクレイドの楽譜をしばしばチューバに書き直しています。

さて、ここまで一口に“チューバ”と書いてきましたが、そもそもはラテン語で“管”という意味で管楽器のこと。旧約聖書にも登場します。現代の発明されたチューバにはさまざまな種類があり、コントラバス・チューバ、バス・チューバ、テナー・チューバなどに分かれます。より管の長い「コントラバス・チューバ」はオーケストラを支える役で使われ、B^b管とC管と呼ばれるタイプがあります。やわらかい音色のB^b管はドイツのオーケストラや吹奏楽で、明るい音色で音の輪郭をハッキリ出せるC管はアメリカで主に使われます。少し管が短い「バス・チューバ」は小編成のアンサンブルやソロなどに使用され、E^b管とF管と呼ばれるタイプがあります。E^b管はイギリスの金管バンドなどで、F管はドイツやアメリカでより高い音をメロディックに演奏するときに使用されます。今日のブルックナーでも、銀色のC管と金色のF管を一部で使い分けるんですって。「テナー・チューバ」はB^b管より1オクターブ高い音域を持つ小型のチューバです。吹奏楽などで使われるユーフォニウムがこれとほとんど同じ楽器です。チューバの仲間にはほかにもあります。マーチで有名なスーザが発明したのが「スーザフォン」。丸く体に巻き付けるような愛嬌のある形は、屋外のパレードなどで目を引きますよね。ちょっと変わったところでは、イタリアに「チンバツソ」という楽器があります。ヴェルディや



※C管の場合
音域
ステージのココにあります！

ブッチーニといったイタリアのオペラ作曲家が、ドイツのワーグナーが使ったチューバの音に対抗して用いました。一見トロンボーンのようにですが、伸び縮みするスライドがありません。小型の「ワーグナー・チューバ」という楽器もありますが、こちらは音域も高くホルン奏者が演奏します。

これだけ種類のあるチューバですが、同じタイプでもメーカーやモデルによって管の巻き方など見た目が違ったりします。また、写真のようにロータリーとピストンという2タイプのシステムがあり、その個数も4個、5個、6個などまちまち。ピストンには楽器の中央あたりについているものと上のほうに縦についているものがあり……と、チューバのスタイルは本当にいろいろなんです。

ところでチューバの奏者は、オーケストラではふつつ団員は一人しかいません。だからプロのオーケストラに入団するのはとっても大変。一人が採用されれば、その人が途中で辞めないかぎり何十年も次の募集がないのです。実際オーディションがあると80人くらいの応募があるとかが。とてつもない狭き門です。オーケストラに就職できないチューバ奏者はたくさんいて、実は埼玉フィルでエキストラで吹いてくれているのも、今は音楽高校でチューバを教えるプロ奏者。たまたま団員が友人だったついでで出てもらっています。

では彼に少し話を聞いてみましょう。これまでどんな音楽の経験をしてきたのですか？

「子どものころからピアノはやっていましたが、本当の音楽との出会いは中学校に入って吹奏楽部の見学をしたときの気がします。合奏の音を聴いて衝撃を受けました。次に印象的だったのは、音大の授業でオーケストラで吹いたとき。それまで吹いていたのは吹奏楽だったので、オーケストラの音楽というのは本当に素晴らしいと思いました。3度目の衝撃は、先生が吹いていた東京交響楽団に最初にエキストラで乗ったとき。こんなに合った美しい音がするんだと感激しました。最後の衝撃は、当時の東ベルリンにあったベルリン放送交響楽団の来日公演に乗る機会があったときです。ブラームスの交響曲第2番を吹き終え、アンコールのバッハの『G線上のアリア』をステージ上で聴きながら、例えようがない



このカップのなかで唇を震わせて音を出す

ほどのきれいな音に自分が神様の愛に包まれたように感じることができました」



左がロータリー、右がピストンの機構

——羨ましい！ 素晴らしい体験をしてきたんですね。ほかにいろいろな先生、海外にも習いに行ったとか？ 「印象深かったのは元シカゴ交響楽団のジェイコブス先生に習ったことです。チューバや金管だけでなく木管や弦楽器などの音楽家にも影響を与えたとわれ、Song & Wind (音を風にのせて歌う) という教えをしていました。83歳で歩行器なしでは歩けないような状態だったのに、僕の楽器を吹いて見本を見せてくれたその音の豊かなことと言ったら！ これは一生の宝物です。亡くなったという知らせを聞いたのは、その1か月後でした」——それは忘れられないでしょうね。ところで失敗したことなんてないんですか？

「先生のオケにはよく乗せてもらっていたのですが、一緒にストラヴィンスキーの《春の祭典》を吹いたことがありました。リズムがとても難しい曲なのにろくに準備もせずに練習に行き、結果ボロボロでこれは先生にしかられました」——プロでも止まることもあるとも噂されます。本当に難しいんですね。それにしても、楽器が大きくて持ち運びが大変そうですね。

「そう。吹いているときはいいけれど本番が終わればただ単に重い物体なわけで、あまたこれを持って帰るのが……と。もちろん車ですが、学生の頃は背負って自転車に乗っていました。本番の日にはそれに衣装も持ち、雨なんか降ったら傘も……」——それは危ないですよ！ では最後にチューバの魅力。吹いていて楽しいのはどんなとき？

「トロンボーンセクションと一緒にいい音を出せたときの快感、ですかね。今日のブルックナーでは、そういうシーンがたくさん出てきます」——そう、聴きどころ満載ですよ。大ホールをゆるがす低音の響きを、今日も期待しています！

* *

オーケストラで使われる楽器を演奏会のプログラムでひとつずつ紹介してきたこのシリーズ、7年にわたった連載も次回がいよいよ最終回です。どうぞお楽しみに！ ※バックナンバーは埼玉フィルのホームページで順次公開中です。